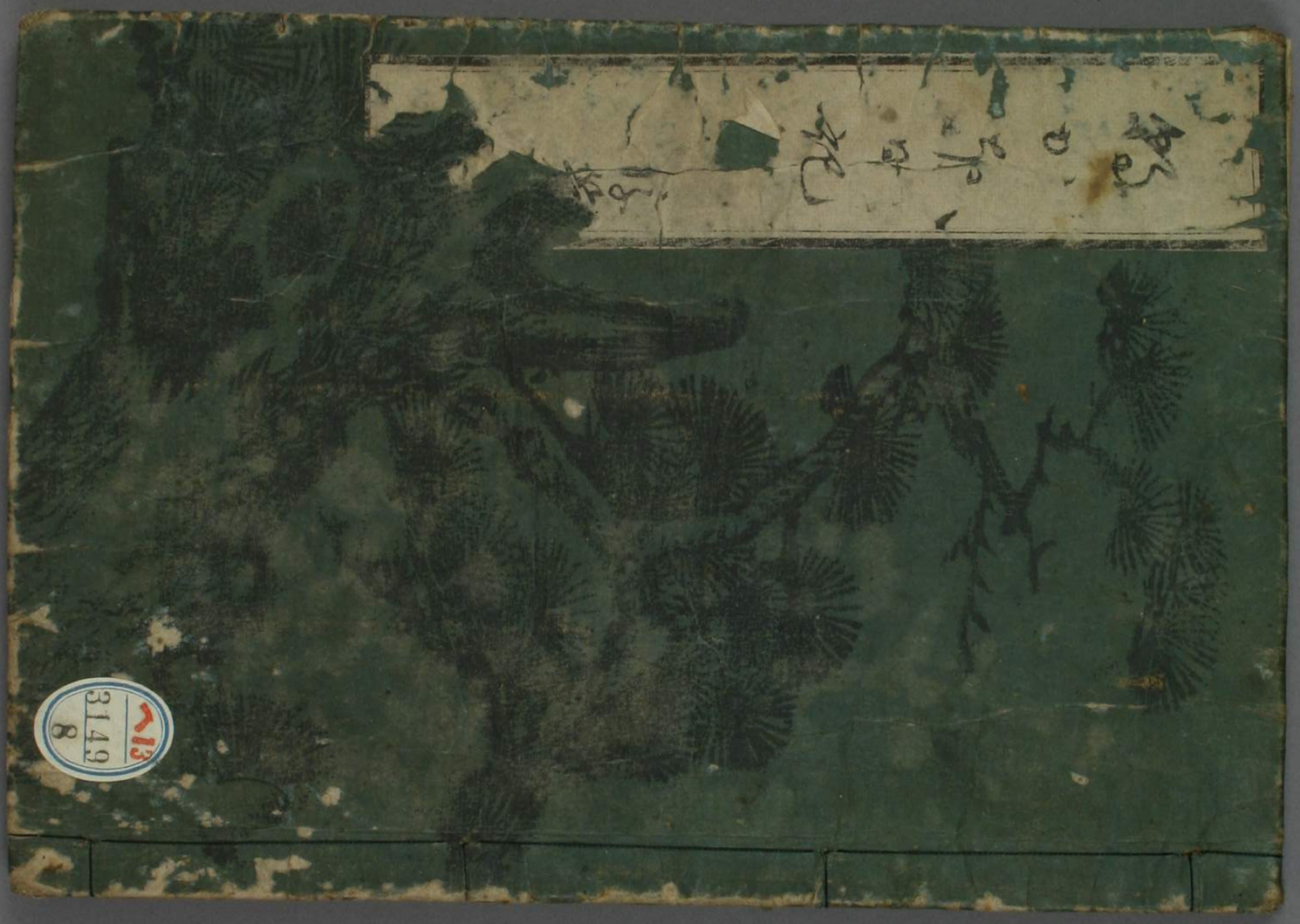
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Centimetres
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



713
3149
8

特へ
3149
8

# 朝顔日記巻之六　故芝叟遺話

柳浪　著

## 十三回　関

名妓紅拂ハ李衛公の英雄を鑒、佳人鶯々ハ張君瑞ガ才情を憐ふ。私奔私約の醜態ハ遽莫両個ヨ一貫たるその氣烈ともて、白璧の微瑕ハ掩ヨ足ぬん。宮城阿蘓次郎由ありて、駒澤の家督を継、次郎左衛門と名を更めたるヨ、秋月ガ妻水青ハ勿論、女深雪ハ此あしとい夢ふだも知ず、駒沢ハ別人ヨ成ると心得、一心誓て異夫ヨ見へじと、遂ニ其家を出亡、それより囲戸ガ舎ヨ止らまてハ、鍼の席ヨ坐し、或ハ亡ハガ院ヨ幽らまて、炎の塁ヨ在ガごゝ、幾十の艱苦を嘗悉、

彼ら〳〵に今ハ憂身を捨果て。世ゑ又怖るべきものハるけれど。渡海の泛宅ゑ坐てハ。亡頼者の觸犯を豫避。夜ハ終夜寝も寐らもず。名たゝる播州灘ハ半百里程の大洋なるゆ。候し秋已ゑ果とまゞ。風いよ〳〵烈しく。況て前程ハ鳴門の奔潮盤渦出。看々濤起て山の如く。船を蕩颺汰皺しつ。凡庸の婦彼ゑせゞ。隨即眩暈つゞ。さるゆ深雪ハ端然と危坐て顔色も變でぞ在ける。いつゝ高砂の浦畔を後ゑふし。明石の峽戸と過又来方の想きて。いよ〳〵その人と眷戀ゑ只管神馳しゞ。やゝ都の天の近きたるぞ楽しゝ。やゝ水送山迎て。蘆ゞ散浪速の港へぞ着にる。かくて深雪ハ浪花とさち出難ゑく帝都ゑ歩着て。嬉の余旅疲をさへいとハず。疾や遅と紫陌ゑ入やいる。居趾ハ定らず。只宮城阿蘓次郎ゞ僑居ハと。雪擢むやうゑ尋ね搜せバ。速うゑ知るべうも彼し。看寸〳〵天も晩たきハ。只得先斗町の逆旅店ゑ歇宿を占。自来盤纏とて准備せざるもへ。あるほどの隨身衣を沽代るして日くの費用とす。いづを阿蘓次郎ゑ遇さへとまゞ。自在といるゆ。高を括ゑ。果ハ襲までも。粥萬盡せしぞ不論好反さて其寓居を漸下河原ゑて。尋あたゑしうど。今ハあらぬ票札ゑ替てあゑけるもへ。唐突ゑも呼門しがさく。貼壁の賣烟舗ゑたちよゑて阿蘓次郎ゞ下落と問ゑ。店小二ゞ着實隣家ゑ宮城阿蘓次郎殿として學問の師範と做人のおいせ〳〵ゞ。何事のあゑけん。近曾遽ゑ中國

に下らをらう。その後ハ鎌倉に住まをて今ハ声價人にふまして在せるよし。ある書生衆よりを傳承まいりをきしといりけるを。深雪ハ聞よりを阿と叫び。忽地仆伏て。半晌昏暈ふう。ふまを着より對門隣壁より人夥集合。顔に水うち灌ねどしけをば。とかくして徐々ふ甦をぬ。人々ハ烟舗より動静を聞て。とふくぐ哀まがを多方と懇ハを扶持。原来宮城氏に由縁の人なるう。宮城氏鎌倉に在すよしハ。吾曹も仄聽しべをぬ。さもあらば。早く鎌倉へ下て對面あま。鎌倉といへハ迥なるやうねまど。行程僅に十日餘とそふる。さぶかを心怯おいしていハ。獨行のかど放心不下おもいふ。氣的實に脩たまへと。着力ていと懇に懇をけふ。何處の浦ふも夜又ハねけまど。分て都下ハ人の心も優しく仁けあをて。那の官道をりけば。日の岡の到下れを。そまより山科とふ地方を經て。大津とふ驛舎ふを。今日いまど日も高けまば。大津までハ容易往せたまへべし。れんぐ問ぬふとさへいひのゝまる。深雪ハやゝ人心地つきて。都人の好意を感激。やゞて杖に技らまを。蹴揚の阪を躋り。姥ゞ懐と過ぬきゝて程かく名たくる逢坂山にぞ着にける。ふの處にを。湖水し些見えて。渺々たる水光天に接して凛烈じげるを。深雪ハ猛然とおりふ。やう。ふまをりさきの東路ハ行程かを迥なるふ。いつゝ衣裳も沽却て。裂縫庁衣一套憂身を掩ば。ふの項の寒氣肌肉を侵し。心地まと例るら

ず。且這里までの一路も、京へさへ着たまバ、情郎ふ遇る
ふとと。ふまとのゝ頼来て幾許の艱苦を嘗しよ。その人
今ハ在さどして、鶏ぐ鳴東の天よ在をと聞。ほど〳〵精力
と脱し。往つ還ふつ風痴のごとく、獨躊躇邉よハ。関の
清水も墜紅ふ埋もも、神の檜垣よゝ葛も。色もハふせ
し霜枯ふ。ゝうふし返曠の影残ゝ。對山の門まゝ間
よふ。一陣の朔風吹颯て。罩穿の骨膸ふ冷徹をバ。遍身
たちまち粟粒もとふ。そのまゝ寒戰ぎ。おぼえず咬牙を
さへふしつ。たゞ右顧ても左顧ても子然たゝ一身ふゝふ
かく俄ふ寒邪ふ冒さまて煩燥く。心細きことゝゝうう
ゝ。今ハ一歩もゝなひるふとあとハず。只得ふの夜一夜

泣あゝしけるが。曉ぐとふ風をこしふめふて。疎雨のやう
ふふふ出るふ。まふ一層の愁とまし。泣く宮居の蕪下ま
て匍匐きて。残喘もたきあへずあふけるふの朝まふた
ふ。驛の里正等幹あふて經過ふしが、沍卧せる人の啼く
声。いとふそゝくたるハ。草葉ふよハる虫の音ふもまがゝる
と。聞咎て立ゝぐまう。但見ふいと臈たけ形る未通女の。
いたく羸ふて。身ふハ一套の襤褸ふ纏ひ。戰慄居ふる
顔の。小厮が荷ゝ諸葛菜の葉よふも青く。さしも果敢
ふけ形る挙動ふるふ。ふうく憐閔を催し。夥伴のものゝ
ふうち語らひ。這の病女ハかく貧窶しくふふたまと。凡
端の賤からぬハいうさま由ある人の果ふらんさても痛ハし

心ふりきも
ゝゝあゝ
風そ
あゝ
かゝの花の
ひとゝゝ

高三隆達

きゐとふのちずやと。即便袋よりて。丸藥かどこうでく是を
飲しむるば。土人どもい。やうて熱き白粥など拿来たうべ
させつ。里正いまと土人等と商議この處よりあやしの黄土
小屋を修ういひ。藁の席を敷せ。稲巻ふどして。卧たる上を
覆ひて。いさゝか寒冷を凌せける。交加の人もさをとういれ
て。一銭二銭を丟てて過けるとかや。深雪ハ阿蘓次郎を慕
あまりて。日ハ終日。夜終夜流涕焦泣はどて。遂に両眼泣潰。
今ハ蟬丸の因果と惹て。俄亡目となりて果しハ。哀といふも惹う
ぶう。志うるふ一身の病毒銀海に凝磊しゆへこや。半月ぐう
志て軀ハ健ふるて。四肢の屈伸も自由ぎまけて。さをいかく
他郷に流落。剌膝容るどうてのの小屋に起臥。ふせきさと

何に譬ん。さをバ由縁の方ようとて。よと問おを人もおし。
故園の記念ゝう。伴ひともれの人ハ。天虚ゆく月日のそうし
と。それさへ拜まをぬ身とおをて。夜あらねども野于玉
の。暗路を迷ふとびゝさふ。たゞ音信るものとてハ。馬驅丁が
唄からねば。松吹風う。澗のかがをの響のを。ある時ハ。筑紫潟
の父母と戀ひ。ある時ハ吾嬬るう可憐郎を想ひ屈してを
居たをける。忽日まと父老ども来て。深雪に對ひ
いゝやう。鄉の日佐の惱ふうて時熱に犯されて
の譫語に。あいを早く鑑倉に下て。こが郎に遇まは
ゝと幾十回ういハをたて。そハ真情に侍るやと問ひ
けをバ。深雪應て声うきくもて。いうふもこが郎ハ東方

の天ふときくからよ、尋ね遇んと歩来て、ひらとつゝや病寒。おの路上よのたまふし、不意目らいの見えね身とふつゝぬ。ふらいあまどおのまやま。命のかぎゝ精かきゝ。神併の冥助をたのゝ、環會とれもひとゞる。尚おのまよ結果るば。遊魂とれゝ下らでいかゝとつゝ。父老いへらく。さもあらば。伎よい、什庚ゞ習熟らまたる伎倆ハひらどろゞ。深雪ハ聞てうち黙頭。既然とらゝ三絃子を彈會てへる。父老ハ已ばとろゝろふ合へる臉して、好く三絃とさへ彈まるば。鎌倉へ下らゝふいよき飯資ゝとて。已いちとおぞちて。驛中を募。五銭七銭聚めゝ。やがて二貫ぞうふぞれゝふける。父老ハおの銭子もて骨董舗よゝ。一張の樫柄三絃を買得て。深雪よあたへいざさまを彈て。何かゝも曲子を唱ひ。些ぞうゝふゝも繦頭を得て。そまをもて路費とし。一驛一驛と驛送よ鎌倉へ下らまよといと深切よ教導ける。這の父老もまゝゝ得がたき奇特のものよぞあゝける。深雪ハそまよう。父老等が好意を嬉しゝ。いでさらばいの三絃を彈て東海道を下らんと。沉思よ。ゝまかく瞻眼しゝれゝふたまば。今や郎よ會面とも。極めてそゝといい認たまいゝ。あまば那方よも記得ある。朝顔の曲子を唱よふゝ。袖ハ不覺よ滴せる。露の乾る間の葬の蓁めるぞうゝや つまてし。憂身を照す日影さへ見る由もかさ干隔滂

女たゞ羞澁さ難面さよ涙まぢらす疎雨のそらくゝと三もふきかしと。操ふる三線の愛惜と。夫戀鹿の鳴音う。哀情ふくむる声ロよい。聞人ざとよ感よ耐。靄よ咽ぶ黄鸝よ優ア。迦陵頻伽よも劣いせしと喧とくいひさいぐほどよ。那方這方よアもてやさをて。露むうアをいあもど。惠ミの纒頭の員副て。いまい綴補かをども新しい夾絮をうち襲。餘寒を凌ぐ便ともかアふを。さて這の深雪ゞ。往先くの土人ども。深雪ゞ真の名をきゝねバ。只朝顔くくといひ囃ゝとれ。朝顔の嬰と喚做して。海道筋よその名高ぞきゝへける。まゝ朝顔ゞ經過ところの驛くく朝貞の曲子大よ流行。狗うつ黄口児

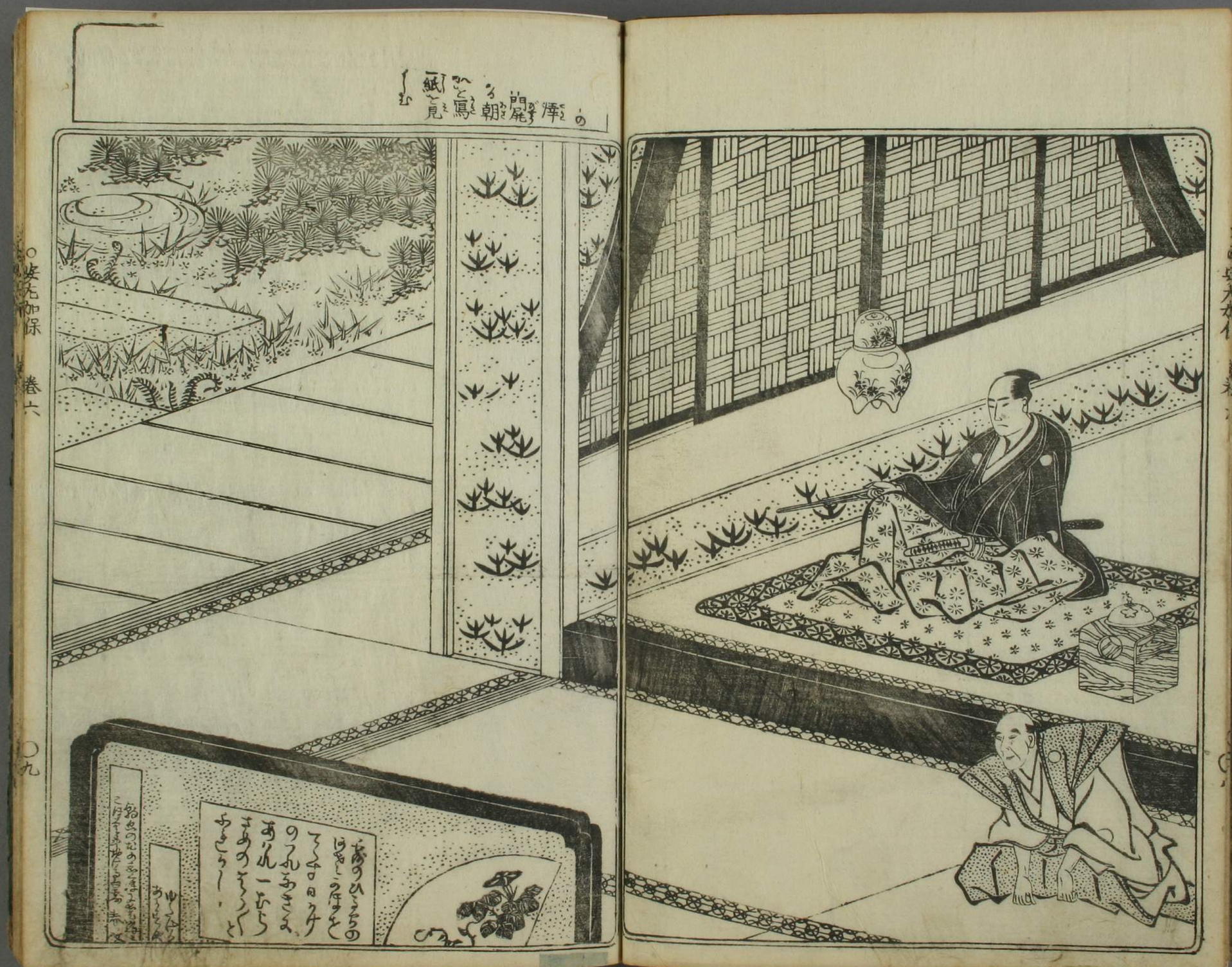




はさらふもいとず。乾菜葉さざむ飯盛婢も。殺鬼春喫無籍漢まで。古の曲子を唱和。門ゝ巷くハ。ふをゞ為ふかしゞまし。

十四田川

去の春ハ羽林大内介多々良満興殿。幕府の御休暇を賜さま。本領周防の山口へ赴任せらる。寵臣駒澤次郎左衛門御前驅たるふよアを。騎長岩代瀑布太と同道して殿よアを三日先だち。鎌倉表を起行けアを。行バ程ぶく業平の中将の鹿の子まだらと咏せ玉ひし。冨士の山脚ぶる駿河の府中ふゞ着きふける。駒澤も今ハ大藩の國老格ぶまバ。その行裝いと美ゞしかてき。本陣よい駒澤ゞ定


の
煙麗朝る
寫へと
紙と見む

紋の幕を張。泊札高やゝ建おきて。玄關前ハ砂子堆く盛あげ。そのこゝろ水うち灌ぎ。亭長ハ麻社祢うち着て。恭しく候迎ぬ。駒澤次郎左衛門正廳ゑ上をバ。亭長が奔走大ゝ方ならず。次郎左衛門やがて。亭長ゑ宿資とらせぬ。かくて次郎左衛門ハ浴室を出り。一盞茶時湯氣お解し居て。堅右と看ゑいと新敷る矮屏風ゑ、さゞく可賞敷る一ひらの色紙を。貼交へてあゑけるを。ひく〳〵讀下せバ。已一年兎道の螢狩の舟ゑて。深雪が握扇ゑ寫てやゑたる。朝顔の唱歌よてあゑけをバ。次郎左衛門ふゝく不審こゝ。右思左想ゑ。那の同舟の伴からで。さるべうも敷きさの唱歌。誰水莖の痕ゝハさらねど。斯處ゑて見んとハ料らざゑをと。とふゝく放心不下バ。そのまゝ掌を拍引客女を呼ゑ せ。かの色紙を指點。まい何等の人の寫たるふゝ。伊ハさらずやと問けをバ。引客女應へて。さの屏風ハ漸ちゝきこゝろ。裝飾てまゐゑ侍る。御尋ゝる地紙の文字ハ朝顔の流行曲子ゑるゑよし。弊宅の児輩の寫字師ゑゑ。寫て餽らを〳〵と。亭長のさうさゝる式承ハゑぬ。鎌倉ゑハいまゞ葬の曲子ハ時行さうさずや。這、里等の驛くゞハ頻ゑさの曲子ともて囃し。むくゝけふる馬子ごもをら。唱ひあゞを侍るふとゑ。次郎左衛門ハ其まゝ眉を八字ゑ敷〳〵。そハまゝと何如ふる緣故ふより。時行出せ〳〵ぞと。い〳〵恠める面もちせるふぞ。引客女ゑ

やう。さきハその事よくべる。ふの頃朝顔と喚ませる。十七八ぞうの美しき孃ど。東の方へたづぬる人のあるとて。畿内よりとぐ来りて。その蕣の曲子と三線子ふかけて。いと有趣唱ひ侍る。始めハ。花子のぶとき風状しど。今ハその藝の庇よりて。張三李四よりて。もてもやさまて。やく時わき。ぶをとの驛より留らきて居くべる。客官ふも召れて聞せたまふ。御慰鬱ふもれて侍らんと勸ね。次郎左衛門聞うちよりも驚悸ぎ。何とれく肚裏よや徹けん。さらバいちくやく聽まわしと。同歇せ〜瀑布太ふ對ひて。あをと議ま。瀑布太も。今宵いとまて徒然かて。そハ一段よりめて。と諾ひけるゆへ。そのまく引客女ま吩咐て。いそぎかの盲女と招き来らしむ。時ぞうあて。宿の下従ど朝顔ど奈てさくふ。といひつぎ。孃ど手をひき来て。縁席布たる階除ま坐せしぬ。孃ハ〜そばらしげま跪ぢき。低頭して礼とふせる。その舉動朧氣ふらねバ。次郎左衛門ハ燭の火影ま。一目省て。原来深雪ど れの果ふるゝと。肝たぶまたる寔方ま。孃ハ律呂を調せつ〜聽賓客ととど郎とい。神ふらぬ身のえもふらで。操初る憂身まも。虫ど知すとつふものれらん。只何とれくうちふれ。れのづゝられる涙声ふて。

ゆのひろ宮のわさがほとゝ次日ひうげのほをふきま。あいれ一村さゆのとらしとふまかしと。れ〜反〜悲壮くも彈れ

唱。心い空ゝ吾嬬ゝる。夫を想ふ想夫憐。夫の春雄ハ
偷眼ゝ。看をバ見るほどうたがひなき。とゝ妻ふるゝ痛しや
世ゝ亡人とおもひしゝかくも窶をて存命あをしゝ見
當初ハ花やく容貌いと窈窕ゝ媚きつゝを。今ハ凋める朝
顔の露と帶とる愁眉淚睫。とをふくもれもひとゝら
で。氷人して舊の名と告さをしハ。おゝなき過。百千回悔
ても還らず。妹ハをきぞとゝちらぬも道理。明石の浦の盟
とたがへず。こがためゝ節をたて。家を逃をて飄零来没秋
波とまで称をたるハ。極めておを哀慕のたもをる殃ゝや
あらん。可憐妹が情貞やと。骨髓ゝ徹める憂悲しゝと。
心胞胳と白刃もて。剮るくゝよゝ堪がたく。みぼを涕洒ハ泉の

おとく。声ゝ呑おむ泣顔と。岩代ゝ見らをしゝと。扇ゝ
掩翳背向バ。廣坐稠人もとをちらず。涕うちかをて黙
ちたる。瀑布太ハ一個鉄腸漢。婆ゝ方と斜視て。労佞
ふてあをき。唱ざまの殊勝さ。伊勢の海席田ゝをハ。今
めきて有趣ゝをき。今一曲と所望けるを次郎左衛門ハ
おをを止め。纏頭を與へて退らしむ。瀑布太い執事ゝ情
がとく。いと敗興ハ氣の嘴瞼ゝ。次郎左衛門ハ適間ゝを
胸うちにぶをて。悲歎のあまりふたゝび聽ゝをのひゝ強
て瀑布太ゝ攔止しゝを。かくて次郎左衛門ハ夜深人靜る
と候て。又も前の引客女とまねき。仔細あをバ。甲夜の朝
顔とやらんと。密ゝをへ呼よせくをとゝたのをけをハ。

嬰あさがほ
朔顔の曲子
こうたく次郎
左衛門これを
聞てくるはんざ
長憐と催す

五數

引客女ハ心ゝ得て。その夜人ゝ走らせけるゆ。使
用ゝて〻やう。朝顔ゝ宿よりまうすハ。比先清水と
〻在處の饗筵ゆよむまして。迎轎ゝ乗てとく往ゝられ
バ。今夜ハ那方ゆ宿歇やそらん。天明でハ歸来まう
をさゝじ。とのよしを聞。次郎左衛門深望とうしゆひ海
月の骨ゝ遇としもおく。いとほおおく想屈まゝ人ゝ
をず嗟歎煩悶と甲斐ゆし。次郎左衛門例五更起
行のおとゆをバ。夜間ゝ朝顔ゝあゝさとかゆハず。瀑
布太ゆ嫌疑ゆうゝせバ。計較万種もあらんとおもへ
と。今ハ何ともせんをべかく。ほねゝ肌身と離ざゝし
妹ゆ記念の扇をとうで。亭長を呼よせて。此一一

たる縁故のあをバ。ゆの扇子ゆ霄の鼓ゝよりけられゝ
と。まゝと別ゝ一曩の金子を副。諄く托ゝて迦與られバ
亭長ハゆをと収手。慎てその托意とぞ畏をぬ。亭長
ハ二位の客官と送ゝ。まだ夜ハあけてねをねども。また
しも朝顔ゆ宿ゝ使をやゝて伴来らしむさまども
朝顔ハ。何くをゝと惶ぐうて。已の下刻ゝやうく出来ゝ。
亭長ゝ對て昨日の謝をと叙。朝まだきよゝ忙しく呼び
来ゝたまゝハ。底事の在しけるうと。あやしむゆぞ。亭長
いへらく。別の事ゆもあらど。甲夜の貴客の御托ゝて。
ゆをと汝ゝ羞しくをよゝ。一柄の扇子と。一封の金子
とを遺しゆをたゝと。そのまく手迦しををバ。朝顔ハ

眉を顰め、さいぶうし。故なき御方よりまで。かく沉重なる金子賜ふべき覺えなべらず。と數回扇子をば捻りまはし。撫つこをうつしてあるけるが。やとらその扇子をさし出。家公方の扇を見てたまはを。倘や蕣を描あるて。その側に。こらハがれねよ唱ひ侍る。唱歌を寫てハあらざるや。とことれくらよ。亭長ハ眼鏡をうけ。その扇子をひらを見て。正是くくいとるくおく。一輪の蕣の花の畫に露のひるまぐ寫てあるハ。おをを聞よ。朝顔ハ恥ずの吻と長大息つく。亭長ハ扇をうちくへし見て。朝顔殿まぐ何う寫てあるよ。朝顔いく慌ぐ。何おとう寫てあらんと。そぐろハしくも嘲よをば。亭長ハ扇の裏書

如誦。宮城阿蘓次郎事。駒澤次郎左衛門と記してあり原来駒澤殿ハ舊宮城何某と申せし人ねをさとといひも果ぬよ。朝顔ハ呆をまどひ。おもいぐも展轉。人目とも羞ずとて乱して。身ハ空蟬の蛻殼しぐく。什故宮城阿蘓次郎あと駒澤次郎左衛門とや。それをとゞ尋たる人ふを。南無三寶遅かてし。いて斤時もしやく追ひうんと。足も空よ驅いぐすと。亭長ハやがてひきそぐめ。そのやうよ焦燥たまふる。あまをよ慌て急がるば。蹶きて怪我もやをらん。駒澤どのハ五更起行のことおをば。迎も急よハ追つさがたし。殊よいの大雨よいつて途も歩らるべき。さハあをぜひよ往ふとふらハふを。と着

往きやまと、簑と笠とを把て迎せバ、朝顔ハ涙と流し、辱
ぶ〳〵とそのさうら着て、杖とたのをふたど〳〵しく、西
の方へといそぐ。心ハ飛と脚果敢どらず、雨ハます
〳〵降きまさる。宛も篠をたくごとく、斜風ハ衣服と
濕腐し、辛じて大井川ハ歩りたけバ、コハ悲し、大鼓
打鳴して。只今川留まぬとのこゝろさハぐ。深雪ハ已でハ
氣疲足痿て。ものを聞よりも。身も世もあらぬ。大内
家の御藩中駒澤次郎左衛門殿ハ何如ふと問バ問屋
場の者ども。そハ今一時ごろ先ハ。川を越たまへりど
いふなぞ。岸うつ浪のよるべなく。松ハ〳〵蔦のたのもも
たえ。おぼえず大地ハ打坐、躊躇して悔めと詮ぶく。
たゞ声ハ放ちて泣叫ぶ。剰さへ笠とバ川風ハ吹
こらをて。

十五回　豹

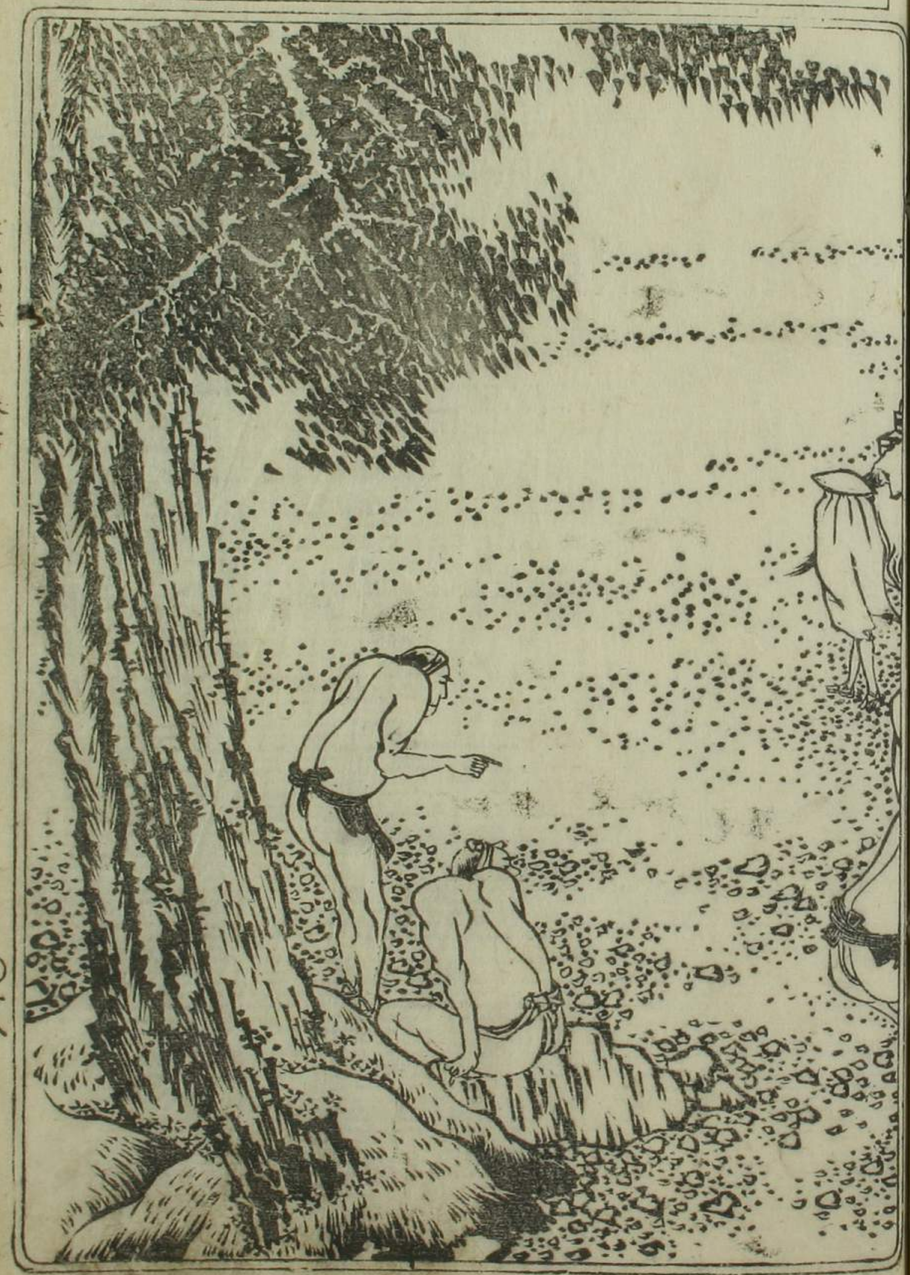
駒澤次郎左衛門春雄ハ、大井川ハ渡りてハ。大小天
龍ハさらぬ。一路些の川沮ぶく、剰連日天晴ハて。暁
起ち晩ハ歇ぬ。程ぶく帝京ハちゝづき。草津の驛ハ
まだ夜深ハ出で。午の貝吹頃ハ山科ハいたり。所謂
奴茶屋ハて少憩とぶ〳〵ぬ。爾時一個の乞丐。だ
たる声して。常盤の州ハ。山鰻鱺と。唄ひたく蛇と
使て銭子をたゞ。次郎左衛門隅隙ハもを就透看白歯
者棚倉忠吾と呼ひうち耳語。また蕎子ハ坐て

く、行まと二里ばかり。いと冷静き古刹のあるとき
て。簫然たてさせ。筑八と跟方よ従ゞへ。門よりて入
来りて閑玩けり。其の處ハ伏水の六地蔵とて。そ
の昔小野篁冥府へ往還せしと。いへる古跡なり。
忠吾ハそや弄蛇を児と將て。僻處の花の下よ蹠
せて、待居たり。次郎左衛門ちゝづきよりて。足下
ハ橘雞菴まあらずや。別来ハ久違たりとゝに。
雞菴頭を擡て。まをと者をば。鳥金和絹よ大内
家の唐菱の紋を染ぬきたる小袖と着し。一様外
套とうち穿て。茶苧の袴と跨。美を盡せる大小刀
と佩たるが。へと堂くしげれる武夫なり。其を則ち



當初の宮城阿蘓次郎よりあるけるもへ殆その最早
く発跡しと羨を。且已ゞ飄零たるとうち羞澁ハと
應へて俯伏ふけるその状。髪ハ五六寸生長て。剛力なる
たまど。些の力もふげよ見えて。身よハ海松のごときも
一套の藍縷とまとひ。潮沾まりていと淺間し。次
郎左衛門ハ跟隨を遠ざけ。その身縁故ありて。駒沢の
祖業を襲。今ハ大夫の列よも加ハりしとと。まさバ
不思議の因よりて。秋月弓之助とも縁者とおもは
しゞ往年足下の計ひよて。種々の齟齬るどあり
たるとと聞しゝど。君子ハその罪を惡んでその
人を惡まずといへり。我いさゝも衷よ介むと

源雲玄雄
を追ふて大
井川ふるる



あらず。我初浪くの身ふとし時。足下の涯き好意
忘れ難侍るまと袂よりと一包の金子をとりて出し。
こハ些少なれども。露ばかりの謝意を表すなり。
と手自迎與。如何なればさほどまで。流落られ
たるぞと。懇ろうち語へバ。雞菴ハさしも黠慧
ものなれども。今駒澤ぐ寛仁大度ふして。已が
舊惡を責ることなく。剩恩をもて仇を報ひ。若干の
金子を餽たるゆへ。ほとゝ路頭の餓孚となるべき
身の。恰も大旱ゑ雨を得。地獄ゑて世尊ゑ遇へる
心地して雀躍ゑたへど。且れのきゝら駒澤ぐ徳行
ふ化せらるて忽地ゑ邪慳の角を折。始て善心ゑ

翻へて。幾回金子といたゞきて收領むるまゝども
已が奸計ゑて。鷺鴉と區別る。醜漢子の萩野祐仙
と阿蘓次郎ゑ假扮て。弓之助を計較。阿蘓次郎と
深雪ぐ良縁をさまたげたる不義不實とバ。されこ
悔を愧て。看る〳〵滿面通紅。まと〳〵怖をとる〳〵
ぎ。遂ゑその陰匿を讖悔して。獸呆祐仙ゑい影護
奮債とべてしゆへ。只得渠ぐ托ゑ任せ。ちうく無狀
と行ゑひしぐ。天道ハ善ゑ祚し。淫ゑ殃すとうや。
いつう車裳覺。夜間ゑ都門を亡命して。海西ふ逃
くだつて。赤馬ぐ関ゑ在しぐ。從来好る戯として。ある
博局ゑ入夥とうし。且其処の稲荷街るる妓。小支

那といへものゑ嫖熟色と慾とを。嚢金ともをべて
蕩盡し。遂かゝる身分とまで偃蹇とべてきと。
乾々淨々と。泄秘いひ完と。次郎左衛門ゞて深く
嗟嘆とゝ。于戲毒ある藥ハ。使用やうによて
て。結句その功も速ゝゝとといへて。足下の奸才ゑ
機ゑ臨ゝて。正道の事ゑ。役使ゝゝあるゆて。何や
低細と。閑談數刻ゑおよび。足下ハいざ。我ゑ先達
てやく。山口へ下りて待居らまよ。功あらば重く賞
をべしと。そのまゝたち別まて。但うち仰げバ空の
かぎてい淺翠ゑうちかをゝ。遲日の光輝融和
志く。恰好雅子の声うちして。好景ハふとうゝ

榜さく声色のさゝ尾のふゝ〳〵しなもあらぬを
うゑと咏せたまひし御製の。微妙ゝるを。一時の興ゑおも
ひ合山鳥ハ。隅て寐とさくうらゑとゞ妻雌をも
ゝつゝゝて。且感ゞ。且吟しゝ。轎子と吊せて
閑歩けゝる。やゞて伏水の甲明亭とうちさぎ
毋利橋の邸ゑおちたく。まゝゑ浪花の卒分堂ゑ
て迎の為ふして。並の大座船を設けうてけゝるやゞ
てその舟ゑうち乘て。澱河と下てぬそまゝうゝ日を
經て。本國周防の封疆ゑ入。今日ふん山口へ榮歸すれ
いとて。衆跟從も花やぎて打扮せ。已ゑ府下の郊
埆まで来ゝて。豈料す看樓の裏頭ゑ歩

兵長めきとる武士。一隊の健卒と将て。駒澤う前程とふたぎ。厳令と雖ハ。駒澤次郎左衛門。御不審の儀あるよう。おもよう直に撿断所に去るべしと附令し。健卒等と喝して、矢衾をたくま、轎子の前後を圍ませ。外城の御門より入しが。御館の方とバ餘所に見ぬし。十字街頭と横とまて。撿断衙門に到る。駒澤次郎左衛門ハ。其の衙門の玄關より上り。悠こと敞廳うち進まバ。とや上席に。一族山岡玄番允と始とし、肉食者並ひ坐とま、あるが中に今般同伴せし。岩代瀑布太も。先たち来まてあまける。冷泉帯刀為猛ハ。ものき相良主馬と交割して。

鎌倉に至下居たるう。月番とのひ。殊に今日の査験にてあまけるゆへ。日比駒澤とハ二ぬき金蘭ぬまども。公事にハ私の勞語を做とず。抽列で威儀を正し次郎左衛門次叛逆の企せるよし。顯證を以て。訴訟るものあま。意旨ぬくバ。速うに雪冤めさまとと演にける。次郎左衛門ぬまを聞て。ぬハ不圖的ことを承ハるものぬ。ぬいくかもその覺知侍らず。列位知るぬとくふ的こと莫大の御登庸を蒙にま。君の御恩を重る身にして何為大逆罪と犯すべき。何等の黠奴うさるぬとを申し。其奴をやく呼出さま、屹と糺明あるべしと苦まきつて回答けるに。玄番允次郎左衛門を佶と睨へ意旨ぬ

志とハ志らく〳〵。誰ゝあるゝ。證據の東西をとゝへ拿こ吟味ゝ法司屬吏ども。四方上下ゝ口もるき。一個白木の箱を拿出て駒澤が側ゝ閣きぬ。帶刀ことを見て次郎左衛門。この箱ハ。有驗の解魔法師。伽縷羅院とゝ〳〵もの。和殿の請ゝよりて。君奚を調伏せる支度るの具ゝまゝと申せ〳〵。如何〳〵くにと誥うけ〳〵ゝ。次郎左衛門冷笑ひ。志ゝとゝ小人ゝ。仇あるものどもゝ修らひたる。讒種とゝたゝ。志の箱の上頭ゝ。一文字寫たる所と打バ。下披る機關ゝ事古たる伎倆支の。淺てゝさゝといひ嘲す。帶刀ハそのまゝ。拳頭を擧て。一文字を兆ど打バ。撲刺粒とひらけて。中ゝハ一槊の。草偶人の形代あゝたるゝ。透間もゝく。鐵釘を施得たるハ。毛髮も聳はゝるゝ。帶刀ハこゝ副ゝ。願書とゝうあげて讀下せバ。勿体ゝくも大字と呪詛殺すべきいと可怖文言どもゝて。願主駒澤次郎左衛門と寫せゝ。帶刀ハ正視斜祖撿閲ゝゝ。駒澤が手跡と寸分不誤ねバ。志ぞ〳〵合粘次郎左衛門呵々と笑て。コハ愚ゝ帶刀主ゝる大逆を謀ゝるものゝ。ゝゝでゝ白地ゝたのゝ名氏を記べき。後世ゝ偽筆ゝどゝて寃訟するハ。小児の遊嬉ふも劣ゝる下策。傍痛〳〵と空嘘噴くゝ。帶刀もゝち點頭実是博識の譽ゝる駒澤ほどのものゝ。あまゝゝ陳腐草偶人の調伏とい。その人ゝ似つゝぬ手段。志ハ別ゝ野心

と懐者あ了て己が逆望と妨ぐべき駒澤れるゐへ。おく
寃の科を打黙黙けんとせし奸計まらんと山岡氏
銀祖よりかけて寓語いふなぞ山岡ハ頻ゑ眼語それ瀑布太ハ軈
懐裏より一個の巻軸をとりいだし。「次郎左衛門殿。さの連
判状覺知あらん。小的豫。御邊の風狀。不會ぞと。一路
上覘隙しが。前霄目撃るあとのあ了て。御邊の調
度ゑ了とさがし出し。あの巻軸奪取らと。熊野の烏璽
小梵天帝釋より。天神地祇と嚇らせし、自筆の起請
文ゑ。一味の徒黨ゐ血判を押たるをさし出せど。次郎
左衛門些ともさいがず、一巻を閲見て。前の願書といひ。
こまとといひ。よく贋ハ贋たまども。天公も照覧あれこハ



明々ゐる。偽迹ものゐ了。と冷笑す。山岡大ゑ焦燥やを
ま早く黨類らを牽出し。駒澤と對決させよと。高
やゑ呼びたる聲の下ゑ了。健卒どもいと枯瘦て
色青ざめたる修験者と。また一個の相貌兇惡ゑる上
菊石痕黝しく。絶て胖大なる一軀ゑ豹の形を文刺せ
し猛漢子を。高手小手ゑ細らて。白洲ゑひきとゑ。
後背ゑハあまとの。鷲固のものども。狼の如く虎の
おとく。視張了て從こう。這の修験者伽縷羅院をバ
山岡が手の者拘到たるよし。また次ゐる惡捉ゐ
豹藤内と呼ものゑて。渠ハ舊。江刄甲賀の山奥ゑり出
て。ゑるゑ忍術ゑ精く。些の膽略もあるゐへ。いつゑ草

冠の頭領となりて。江湖上を剽掠を做して鬧したれども。常よい賭徒と混ぜ。あるい救火顆徒と做て。種々と身を假粧て。その踪跡をくらませしゆへ。居ところさだうかちさんがその影をだに。捉るさとあとがたし。狙ふどもようう稟わげるとれん。ようろと這の豹藤内去るタ。御寶庫と閃入。勘合の印と贓をとり。逃去んとせし浩處しも宿直の衛士恰好瞧け。辛うじて繦とて。検断所の廳と牽出せしゆへ。検断吏勘察衆も相共紀明あてけるゞ。勘合印と蚕延るゝらい。這奴ゝ分際ふいあるべうらず。いうさま別と。當家と傾けんと謀る白者のあると極をて。ゝ近曽至寶の一種紛失せも

極て這奴が所為とれば。何者と托をてゝうせしゞと嚴しく。拷問とおよぐをるゝと。初頭い拙執抵頑已が一慮とて出とるとし劇語たをども幾十回の責苦と湛うね。遂と白状して。己自来駒澤が大望に與し。嚮と一種の寶貝とも偷取て逦與とき。今とと勘合印と贓を取んと躱入しも。總て駒澤が吩咐ねてといへて。駒澤い二通の口欵と逐一閲完。椽側近躪てとて。両個の縛囚と熟祖をてヤイ豹藤内とやらん我叛逆して。寶貝と竊ませしふんどこい痕跡もふき讟語ねて。從来見たることもねき這面何者ふゝ頼を。假意攜いをとねて生天大的寃訴と構

駒沢悪鷲等と對決す

たるぞ。その主を申せいざとやく實事をまうせ倘一点よりても。偽るまれあるてい。指一朶ばく斫れぬす。捘遲の刑よも行るひつべーと。嚇威うけらまて豹藤内い次郎左衛門と屹と見あげ。ヤヨ駒澤殿うねての計較も不三不四壞了たて。足下ゞ這の修驗ゑ大内介殿を咒咀殺させ。重寶どもと匿しとき。管領の御曹子を養子とし。きをとも奇貨ゑ使ひ。果ハ足下ゞ六ケ國と。押領ゑせんと。猫もまらぬやうゐ謀らまても。斯脱く露顯るとゝへのも。天命是非もれきこと。已でさへ丈夫らきういひて完たるゑ。何食ぬ顔ゑ。まゞ演劇してゐまをい。大賭の局主のやうゑもれき。未練の拳動ゑこそあをと。出故題ゑる雜言を吐けバ。側ふる修驗伽縷羅院も。一様の口氣ゑて。拙僧も和殿ゑ托ん。國主を調伏し。驗あらバ千金と與んと約せらまを。丹誠を凝し。秘法を修せーゞ。痛情くもかく。怯面就虜たるこそ微運ゑをとゝいと朽惜げゑいひ〳〵。始て駒澤といい見あぐるゑ。一表軒昂その顔色ハ温柔たるゑ。沉勇ゑ念を含ゆる威嚴の。そゞろ凛くくおぼえて。完うも月下ふる梅花の。霜ゑ傲をる頭勢ゑ。伽縷羅院意駒澤とやらんい。其人忠直ゑ。ゑ。後先をゝへをるゑ遑あらずして毋を養ふ資のゑ。已ゑこの軀を沽却たをバ。その施主ゑたのまれて。只

無罪人を殘害をうけたるハ。一頭ゐハ孝養のたゐゐ
したまど。一頭ゐハおもいずも。殺生戒を破ゑ。大やら
ゐる罪科をにくまゑ。と殆後悔ゐたへねバ。たぐらう
萎まて俯ぶきぬ。冷泉帶刀声を勵まし。駒澤ゑ
害せんと偽文ハ勿論。那奴等ぐ寃誣の叙次。高の知る
生匹夫めぐ好騙局。ゑまとといひ。かきといひ。揃も揃ひし
惡黨ばらいで骨を捏ぎていいせんと。喘吁声ともろとも
ゐ。伽藍羅院ハ。一轉と伏て氣絶たゑ。ゑまいこん一百両の
施主の為ゐ。自ら舌を齧切て。駒澤が雪寃をべき。口
と滅んと死たゑ。ゑの時とや換斷の屬吏とも。帶
刀が令ふ。ゑ。驚破豹藤内を。木馬刑ゐ行ゐいんと。

慌忙その支度して斜きゑふ。豹藤内ことを見るゑう。
大ゐ駭き。擧頭て山岡ゐ目語して止ざるふど。玄番允
進出帶刀まづ嚴刑ハ止らまゐ。眼下ゐ修驗めが自
滅せーゐへ。一個の證種を失へゑ。豹藤内ハ靈符の尊
像の。去向を索べき干係の者。まゑい渠を責殺べ。
臍を齧の悔あらん。今日の査問ハ。ゑまてにせらるべ
とりへ。帶刀もゑまゐ同し。尤然倘這奴とも責殺さハ。
一期駒澤が。雪寃秋ハあらじと。直ゐ健卒どもと令して。
豹藤内を牽出させ。緊しく獄屋へ繫ぎ置しむ。帶刀又
次郎左衛門ゐ對ひ。御邊の上も。御不審全く明ざる中ハ
鈎座を避憚あゑて。逼塞ゐさるべしと付令す。次郎

左衛門ハいとゞ公畏をして。隨即衙門をたち出をバ。設のたる覆綱轎子ゑ乘て。愴々烏衣巷の邸ゑ田ゑ。只得門戸を閉ふらく慎を居たゑろ。

十六回　柴

さても深雪ハ。喪明とゑでれゑ果て。空しく朝顔の曲子を唱ひ東海道を吟行しゞ。不料も駒澤ゞ本陣ゝ呼バを。那の曲子を唱へけるゑ。次郎左衛門。たゞ一目見て。原来我情婦深雪ゑてあゑけるゑ。我今名を替て。駒澤某と称せしもへ。舊の阿蘋次郎かゑとハ。めたもひよらで。こゞたりゑ節操をたて。家をのがゝて。おのゝゝゑ流落。哀慕のあまゑゑや。明さへ泣潰ゝて。かくぞゑ貧窶

くふゝしゝい便ゝきゝとゑ。いとゝいたゑ愛憐さもいや優ゑて。不覺涙の隨るゑ。同歇の人を憚かゑ。扨いたく更て。密ゑ遇まくれたもひ。よびゑ差しゞ生憎ゑ深雪ハ他處ゑ往て。出来らねハ。いゑゑともせんをへれく。常ふ肌身をとれさぬ記念の扇子ゑ。名を更めたる由れ寫副。驛長ゑ托をてゝきをゑゑて。今まで他人とれもひ。嫌ひ避る駒沢殿ハ全然をゞ郎。阿蘋次郎ぬしゝゑてあゑしとゝふゝとを知。忙まどひけく風雨を冒して大井川まで追ゝをゞしゞ。誰をらん比先川沮ゑて。郎ハとく渡りたまひしゝと聞て。ほどゝかを落しゝ。只管くやを

歎き、たの河沮の聞まで。一夜と過ぎと一年もも
長くもがぬ。まさしも病つくべき仮。ととと心仮
雄くしくとて。日あらと川と越精神か
ぎてと程と貪ぎぬ。さどうて婉弱小艾婦ふれども。
一縷の情勇頼く。護摩の灰も猪狼も屑とせず
して。不滞周防の國と下の駒澤殿の邸ハ烏衣巷
裏とあてと聞。旅の疲も出バとて。腫たる脚を曳嘮
て。勞尋ね来て見とバ。のふれしや。頼もカもきと
果たて。まと駒澤殿ハ罪あてて。閉門したまふとや。阿
呀この邸ハ青竹もて鉤と。釘得てあるハふど。人の絮
話とねばえず涙溢落おちて。大地と倒卧瘋ひく。声

を放ちていと泣とふくほどに。やとら人環視して。こや
風狂の婦のきうも盲ふるハと。指ざしあて哂ふもおはうて
あるう中とい又縁故てあらめといへる者もあてね。
洁處と。母子とれぞしき両個の順礼。人叢を押開て。仆
を卧とる狂女をバ扶け起し。埃ねどうちてらひ。種々
懲ハて。何地へやらん將ゆきける。さの両個の順礼ハ則ち
こを。深雪が乳媼。真柴ねるものと。そをが兒子關助ふぞ
あてなる。如何とまとバかく湊巧と小姐深雪と環會しぞこ
索ぬると。往年深雪が露陵の邸を出奔せしとう。母
親水青ハ鵂天泣地。ふげきうるしむあといふっぎてはし。
真柴ハとをを見とまのびず。主母水青ふ已が耵願趣意

孫子弱冠が
邸へいたる

式告僥倖とあて合る。仲間の闌助を具して。主人の邸式
たち出。西國三十三所の觀音を巡拜。のハま大悲の冥應
ともと。今一回養君よ遇せてたべと。丹款を盡して禱けく。
いつゝ三十三個の簡をうち終ーゝど。いさゝかもその驗し
あらで。まと西よ向ひて赴くゝも。故郷の天よ赴きて。
備後の州。阿武門といへる。港澳よ着けるゞ。古の處ゝも名
高き觀世音の在すよ。上ア下の船人どもハ隨意よ
風を祈るゝをバ。菩薩もわどゝ。孰と西孰と東と分ら
れて躊躇たまふめる。おの夕真柴ハ大悲閣よ通夜式
ぬしけるゞ。老眼を絞ア。いと冷き涙をとゝへ拭ひあへで。
隻手よ珠數爪くアぬ。幷よ額突て。日瞑途遠古の
老ゞ主家の養姐と尋出さんため遠く三十三所を
順礼して願けをど。佛の慈悲もあらざるやゝことゞ
信心の届ざるよや。今日までも環あいて。依舊空手と
笈紫ヘ下ア主母よ遇て。何といひとけの待るべきや。
まと何の顔らあるべき。それよりハ寧さの身と海よ沈
過世の劫を果しぬん。阿娘の前途老ゞ後世をも救
たまへと。頑語と獨語やゞて法華經と誦しるらバ直
高攔ゝ飛入らんと。一心の覺悟とぞさハめたアるる。
登時そふらぬ異香うちかをるとて。錦の帷裏よアいとも
妙なる玉音まて。老女さる嘆さそ。汝ゞ誠心厚きを
聞そ尋ぬる人よ遇せぬん。今より五日をぞて。周防

の國山口ゐる。鳥衣巷とゝ所ゐいたゞくよと。正くしたれんにげハ。夢ゝあらぬゝ辱けゐしと。真柴い信心肝ゑ銘ゞ、喜ことかぎゞゝゐゐく、今日ゐんきのとゝろに尋ね来て。深雪ゑ會面けるゞ古恠ゐる。かくて真柴ハ深雪を已ゞ旅店ゑ伴歸て。よのよしを詳ゑかたゝらいかゞゝ芽の冥護灼然ゑまバ。前程可頼ゐはしゅせ。駒澤どのハ義氣ふゝく、後妻と逆へたまいずとさくてべる。まゝ寛の難を被ゞて。當分閉門して在すよしハ。巷の説ゑ聞れど。世のならへしふる。先頃專北山雲陰ゐゝんハ霽てれゞ唱ひしやうゝいく程もあらで。寛の陰も晴て世ゑ出たまひふん。そゝまてい、まづ故郷ゑ還ゞまして。銀海患の保養あらせたまへ。やゞて駒澤殿ゑ申し入團圓婚嫁ゑたゞゝやうゑ計較べしと。多方賺し艶説けまバ。深雪も僅々允容なるゝ。真柴ハ甲斐くくきくもゐ点ひ。闢助を役て。便船を乞しゅ。その曉天降松ゑゞ出船をせしゅ。日あらぎして。故郷かる蕗陵の邸ゑゞ着ふける。秋月弓之助夫婦ハ悦ぶさゝかぎゞゐく。盲亀の浮木ゑ遇。優曇華の花待得たる心地して。あつく真柴ゞ勞誠とも賞しけゞ。深雪ハ朝ゑく垢離を掻。精身潔齋して。只一心ゑ本居。菅聖廟を礼拝して。ゐとれ大自在の霊應ゑて。夫主次郎左衛門ゞ災難を。免つまさせ王へと只祈ゑいのゝて。行時も情ざしとぞ。あハをむべし

一個の貞女ハ不幸ゝして没秋水とゝ獨空房ゝ臥す。
嘆どべー。一個の忠臣ハ寃の災難とからうゝて戸を閉た
るゞ。ハの末那の忠臣貞女めでとゝ團圓や不團圓や次の回
ゝ覧て解したまひね。如斯の語ハ先輩已ゝ道陳ゝ共
這半丁の閑空を嫌ひて。贅附とべるのゝ。

朝顔日記巻之六　終

C 安藤為章 自筆